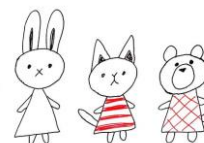


幸せのドア

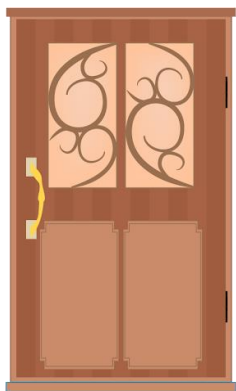
令和4年3月
立川女子高等学校
カウンセラーだより裏面

3月になり、3年生は卒業、1~2年生は進級の季節が近づいて来ました。3月は色々な「お別れの時期」です。卒業・進級といった大きな環境変化を迎えるにあたり、どこか淋しい気持ちや不安な気持ちを感じている人も多いのではないのでしょうか。



今回は、そんな時期にぴったりのヘレン・ケラーの言葉を紹介したいと思います。ヘレン・ケラーは、1歳半のときの大病をきっかけに視力と聴力を失い、見ることも、聞くことも、話すことも出来なくなってしまいました。しかし、その後、若く熱心な家庭教師だったサリバン先生と出会い、ハンディキャップを乗り越えて世界的に有名な教育者として成長します。その人生は「奇跡の人」という戯曲に描かれて、今なお世界中の人々に勇気を与えています。サリバン先生が、まだ幼いヘレンの両手に向かって、井戸の水を浴びせるほど掛け流し、その瞬間、ヘレンが雷に打たれたように「ウォ、ウォー・・・！（water）」と叫ぶシーン・・・それは、ヘレンが初めて「物には名前があること」を理解した場面でした・・・を、ご存じの方も多いのではないのでしょうか。

そんなヘレン・ケラーは、生前、こんな言葉を残しています。



『ひとつの幸せのドアが閉じる時、もうひとつのドアが開く。しかし、大抵、私たちは閉じたドアばかりに目を奪われ、開いたドアに気付かない。』

ヘレンは病気によって視力と聴力を失ったとき、一つの幸せのドアが閉じてしまいました。しかし、そのドアが閉じたことによって、サリバン先生と出会うことが出来たのです。そして、これは、サリバン先生にとっても同じでした。サリバン先生は幼い頃から弱視で視覚障害を持ち、救貧院で厳しい生活を送りました。そして、19歳の若さでヘレン・ケラーの家庭教師となったのです。サリバン先生の幸せのドアが「視覚障害」や「貧しい生活」によって閉じたとき、後にヘレン・ケラーと出会う「もうひとつのドア」が開きました。そして、ヘレン・ケラーとサリバン先生は教育者として世界中を訪問し、二人で一緒に障害者教育に多大な功績を残したのです。

みなさんの人生にも「大切な人との別れ」や「大きな失敗」、「理不尽な出来事」など、幸せのドアが閉じてしまう瞬間が何度も訪れると思います。しかし、幸せのドアが閉じたと同時に、「もうひとつのドア」が開いたことを覚えていてください。それは、今、目に見えなくても、実感出来なくても、確実に開いた「新しい幸せのドア」なのです。そして、それは、今の自分が考えもつかないような幸せへと繋がっています。

